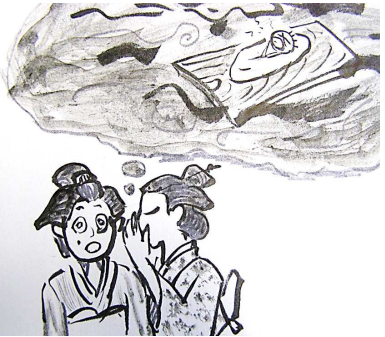


「尾崎大名行列 創作由来」

現代歴史教育は大名行列を徳川幕府の大名牽制策と教えている。それはともかくとして、当時の領民からすれば実に絢爛で豪華で威厳があり、その封地の誇りでもあった。さまざまな憧れと威厳はまさに武士道をさし、領主を為政者としてではなく英雄もしくは有徳者と見る心は理解できないでもない。さて、江戸時代は公方十五代慶喜で終焉し明治新政府になった。しかし、気仙沼尾崎は江戸時代そのままだった。明治維新があろうとも、この松崎一帯では、殿様は鮎貝家であり、吉事は全て靈験あらたかなる八幡権現の靈力によるものと思っていた。

明治の初めである。コレラという疫病が南の方からはやってくるというわさが、尾崎をはじめ松崎一帯に広がっていた。確かに登米方面はコレラの患者が出たと大騒ぎであった。平成の今とは、衛生的知識や衛生観念、が雲泥の差であった。このころは、一人がかかるとその家族へ、そして隣の家へと、またたく間に流行するのであった。



尾崎に老夫婦と住んでいる一人の男がいた。身よりはなかった。きつとどこそこのお大尽様が身分の低い女子に生ませたものだろうとか、尾崎の漁師が板一枚に乗せられて浮いていた子を見つけ海から拾い上げてきた子だとか、あるいは、八幡権現の松の木の下に置き去りにされていた子だとか。この男の幼い頃は、確証もない風聞が、ずいぶんと松崎の浜を駆けめぐったものだ。

ただの男の子なら、そんな風聞など数年もたてば消えるものを、この子の場合、容貌が実に奇っ怪であった。まず体が実に大きい。普通の幼子の倍はあるかと思うくらいに手も足も腹も頭も大きかった。次に、そのでかい頭の髪の毛の色だ。今では若い男女がわざわざ赤色やら栗色やらに染めたがるが、この子の髪は金色であった。そして不気味なのは目の色だった。わが大和民族にもたまには茶色の目の持ち主はいるがこの子は空色なのである。そして何よりみんなを遠ざけたのは肌の色であった。真っ白である。色白美人の白とは違う、真っ白であった。こういうわけで、この男は、幼い

頃から子供らのなぐさみものであった。でも心根はまっすぐに育ち、正直者だった。

村にコレラのうわさが流れた頃、男は十七才。ほんとうはただのうわさだけだったが、本吉の津谷までコレラが流行ってきたとうわさされた時は、松崎村のえらい者たちが集まった。いかにして疫病をふせぐか、みんなで思案した。

うわさを耳にした若いこの男は、育て親である尾崎浜の修作夫婦のことを思った。修作夫婦が病にかかってはいかんといい、庄屋の屋敷で居候同然にしている田舎医者に頼みに行った。医者は「この病は余病にあらず、庄屋様のお飲みなっている薬のみが、疫病をふせぐもの。この薬は、オランダ渡来の高価なもので、ぬしのごとき捨て子には買うことおよばぬものである。」

と言いつ捨てた。

育ての親からいつも

「困ったときは八幡権現。」

と言われていた男は、西日を受けながら八幡権現の急な階段をのぼった。日もすでに三峯山に沈み、あたりは薄暗い。男は昼の漁の疲れが残っていたためかねむけをもよおした。男は鳥居をくぐると、一休みしようと松の木に腰を落とした。何百年もたつてであろう松の大木は、男をつつみこむように、男の上に夜をかぶせた。



眠ってしまったのである。と、男の前に甲冑姿の大男が現れた。その甲冑は、江戸期、戦国期のあのきらびやかなものよりも古くて素朴だ。鎌倉期よりも前のものなのか。兜の奥から重々しい声が聞こえた。

「われはこの八幡権現を勧請せる鎮守府將軍、源頼義なり。いかなる故あって我が手植えの権現守り松によりかかりおるか。事と次第によっては打ち首とせむ。」

と極端な起(おくり)のある刀をふり上げた。男は何のことか分からない。ただ刀を見ただけで、体が石のように固まった。口だけは何とか動く。



「お、お助けください。お、お、俺は、権現に願をかけにきたただけだから。あんだは、だ、だ、だれっき。」

兜が男の目の前まで近づいてきた。そして男をじろじろと見回した。やがて、兜の奥深くにある目を光らせて、ゆっくり大きくうなずいた。

「むむ、われは源頼義と申したぞ。ところでぬしは珍しき面立ち。事と次第によっては、ぬしの願い、叶うこともあり、願のこゝろ委細申してみよ。」

男は震える声で願いを語った。疫病が尾崎、松崎におよばぬように。また、育て親を疫病から守るように。古武士は野太い声で

「おお疫病などたわいないこと。ただし、ぬしの身命を権現に捧げねばならぬがな。ぬしを捧げよ。その青き両目を捧げよ。大空の色を増さしめ、天空の光を大地に強く受けるために。その白き肌を捧げよ。白き雲大いにわかせて、甘露を大地に与えしめるために。その黄金色に輝く髪の毛捧げよ。実りの豊饒を示すために。実り多き所には病は近づかぬ。いかにせむ。」

男は育て親を助けられるなら自分は死んでもよいと思ひ答えた。

「捧げまする。」

兜は口に笑みをうかべて、

「肝強き男(お)の子なり、願い叶わば、本吉山田大名行列に習いて、権現に行列寄進せよ。山田の大名行列は御嶽権現への疫病平癒の奉納なり。松崎尾崎の民も習うべし。」

と言って、あの大刀を兜の頭上にふり上げ、

「おりゃああああー」

大音声とともに男の首に刀をふり下ろした。



朝が明けた。男は、自分は死んだものと思ひ首をさわった。首がある。体に頭がつい

ている。そして男は、古武士のことは夢であったと知った。その年、松崎村は豊作だった。そして疫病は、古武士の言ったように、村の近くで止まった。村のえらい者たちは、若い男の話の聞くに及び、本吉津谷の山田に大名行列を習い、毎年権現に奉納するよう決めた。

尾崎大名行列は明治期には毎年のように奉納されたが、昭和にはすたれつつあった。その後「気仙沼みなど祭り」の際、四年に一度行われるようになった。しかし、平成二十三年三月十一日の東日本大震災は尾崎大名行列の武器一切を流し破壊しつくした。この文化と歴史を語り継ぎ、再び興すのはだれであるか。復興の明日にこそ興るものと強く思う。

尾崎大名行列



気仙沼みなと祭りにて
(平成12年8月)

曲録・馬方 →



曲録・馬方



昭和28年8月15日
← パレード